

今週の為替相場見通し(2020年6月8日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		107.38 ~ 109.85	109.59	108.50 ~ 110.50
ユーロ	(ドル)		1.1101 ~ 1.1384	1.1292	1.1225 ~ 1.1400
(1ユーロ=)	(円)		119.42 ~ 124.43	123.76	123.00 ~ 125.00
英ポンド	(ドル)		1.2329 ~ 1.2730	1.2668	1.2500 ~ 1.2750
(1英ポンド=)	(円)	*	132.69 ~ 139.74	138.83	137.00 ~ 140.50
豪ドル	(ドル)		0.6648 ~ 0.7013	0.6970	0.6770 ~ 0.7100
(1豪ドル=)	(円)	*	71.57 ~ 76.75	76.37	74.50 ~ 77.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 上野 智久

(1)今週の予想レンジ: 108.50 ~ 110.50 円

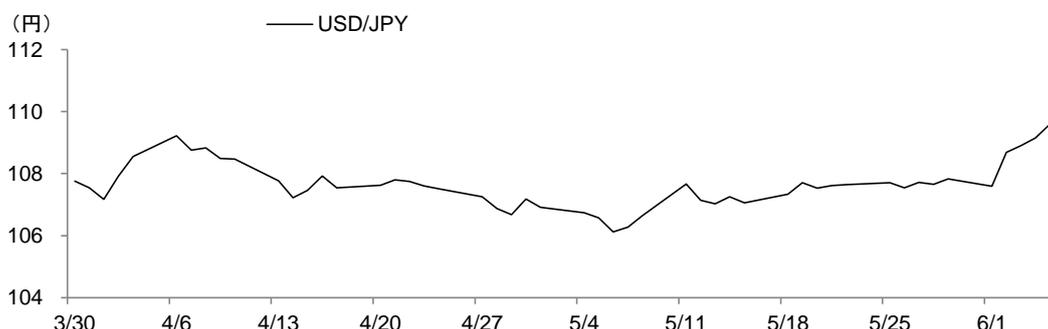
(2)ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週後半に高値をつける展開。週初1日、107円台後半でオープンしたドル/円は、序盤は日経平均株価が22,000円台を回復する流れを受けて堅調に推移。しかし、米国での警官による黒人男性殺害事件を発端とするデモ活動や、先週に続き香港を巡る米中対立が意識されてじり安の展開となり、一時週安値の107.38円まで下落する局面も見られた。2日は、世界的な株高を受けてリスクオンの動きが強まる中、ドル/円も急伸、108円台後半まで上昇した。3日は、オープン直後こそ実需のドル売りが優勢となるも、米金利の上昇に後押しされじりじりと値を上げる展開。米5月ADP雇用統計や米5月ISMサービス業景況指数といった各指標が市場予想ほどの減速しなかったことが好感され、ドル/円も109円手前まで上昇。4日は、ECB政策理事会でのパンデミック緊急購入プログラム(PEPP)の資産購入額拡大決定が意識されて、ユーロ/円の上昇に伴い、ドル/円も連れ高となると、NYダウ平均株価の上昇も相俟って、109円台乗せ。翌5日は、アジア株が総じて堅調な推移をする中でドル/円は109円台前半での小確りとした推移。注目の米5月雇用統計は、非農業部門雇用者数が予想750万人減に対して、250万人増の結果。予想以上の改善を見せたことから、米金利上昇に伴いドル円も109.85円まで上値を伸ばした。終盤にかけて小幅に反落し109円台半ばで越週している。

今週のドル/円相場はしっかりとした展開を予想。新型コロナウイルス感染拡大を受けたリスクオフ地合いは、これまで政府・中銀の財政出動や金融緩和等により反転。足元は世界経済の活動再開の期待感が高まっておりリスクオフの巻き戻しが起きている状況。加えて、米5月雇用統計では非農業部門雇用者数が早くもプラスに転じるなど、コロナで痛んだ米労働環境の改善も確認できる。主要株式市場がコロナ混乱前の水準近傍にまで戻しているのは、個人的には市場の評価と実体経済を鑑みると違和感は拭えないが、リスクオンの状況が反転するきっかけにも乏しいと考えている。ドル/円は110円乗せを試す展開になるのではないかと考えている。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/1~6/5)の値動き: 安値 107.38 円 高値 109.85 円 終値 109.59 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 グローバルFIチーム 大庭 泰典

(1)今週の予想レンジ: 1.1225 ~ 1.1400 123.00 ~ 125.00 円

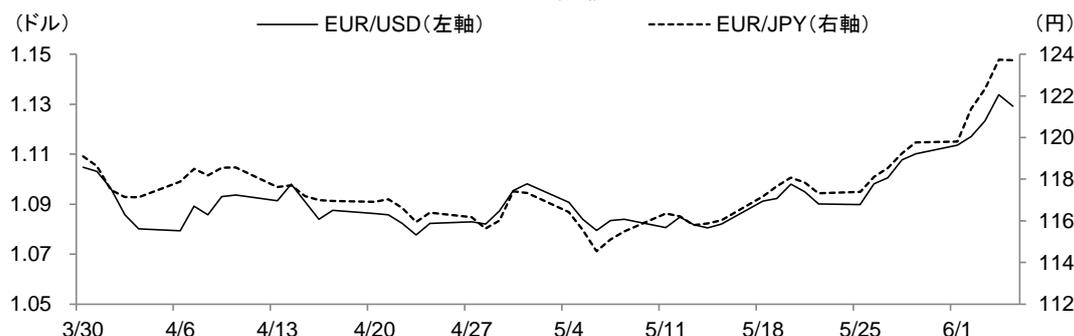
(2)ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は、ECB政策理事会を終えると急伸する展開。週初1日、1.11台前半から始まったユーロ/ドルは、堅調推移する欧州株を背景に底堅く推移。2日は独政権による最大1000億ユーロ相当の追加刺激策への期待感が強まる中、1.1197まで高値を更新。節目の1.12手前では上値が重くなり、1.1164まで反落するが、独追加刺激策やECB金融緩和期待にサポートされ、この水準で下げ止まった。3日も欧州各国での経済活動再開や追加刺激策への期待感を背景に欧州株が大幅に上昇する中、1.12台を回復。この日発表の米経済指標が予想ほど悪化していなかったことを背景に世界的な株価上昇を受けて、1.1252まで上昇。株式市場が上げ幅を拡大する中、高値圏で底堅く推移し、「独メルケル連立政権内で景気刺激策の合意成立」とのヘッドラインが伝わるとユーロ買いが加速。約3ヵ月ぶりの水準となる1.1258まで高値を更新。4日はECB政策理事会を控え買いが一巡し、1.1195までじりじりと下落。ECB政策理事会では予想通り政策金利は据え置きとなるも、PPEP購入規模が6000億ユーロ増加と予想外の拡大に、1.1269まで上昇。買いが一巡後、1.1217まで下落。ラガルドECB総裁が、「Q2の経済縮小は前例のない規模」、「2020年GDPは8.7%縮小、2021年GDPは5.2%拡大の見通し」等と述べるも、金融緩和と拡充が意識されたためか、1.1362まで急伸。週末の5日もユーロ買い優勢でスタート。独4月製造業受注が予想を大幅に下回るも特段材料視されず、一時1.1384まで上昇。その後米5月雇用統計の予想以上の改善を受けてドル買いが強まったことから1.1283まで下落したが、米株や欧州株の上げ幅拡大を受けてこの水準で下げ止まり、1.1300を挟んだレンジでもみ合い、1.1292で越週した。120円手前から週初始まったユーロ/円は前述のユーロ買いの流れから123.76円で越週した。

今週のユーロ相場は底堅い推移を予想。先週のECB政策理事会でPEPP強化が全会一致で決定し、当分、新型コロナウイルスと共存する覚悟を金融政策面で決めたことが、市場で評価され、ユーロ買いが進行した。市場との対話に成功したとも言えよう。気になるのは実体経済だ。先週の独4月製造業受注が過去最悪の低下をする等、V字回復の兆しは見えない。ただ、もはや市場参加者もある程度の悪化は承知の上なのであろう。先週末の米5月雇用統計のようなポジティブサプライズの方に警戒が強いのか。今週の重要指標に8日(月)独4月鉱工業生産、9日(火)1~3月期ユーロ圏GDP(確報)、12日(金)ユーロ圏4月鉱工業生産がある他、11日(木)にユーロ圏財務相会合が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/1~6/5)の値動き: (対ドル) 安値 1.1101 高値 1.1384 終値 1.1292
(対円) 安値 119.42 高値 124.43 終値 123.76



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.2500 ~ 1.2750 137.00 ~ 140.50 円

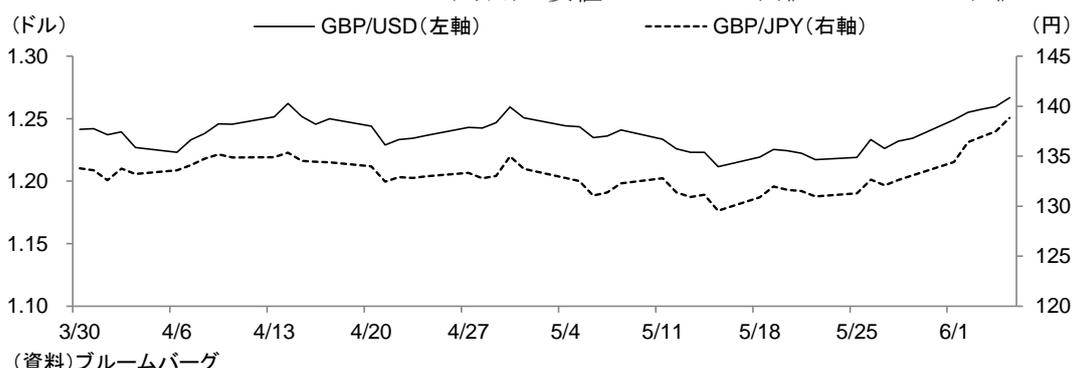
(2)ポイント【先週までの回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、予想外の上昇。週初堅調な滑り出しから、週央に掛け対ドル、対円では頭打ちとなったが、週引けに掛けて再び上昇し、高値引けした。対ユーロでは、週初の上昇分を、週央の反落で、一時、帳消しにしたものの、週引け間際に再び水準を切り上げた。この間、主要通貨市場で進行していたのは、全般的なドル安と、それ以上の円安。その対極にあったのがユーロ高で、ポンドは、固有の要因よりも、周りの値動きに振り回されただけの感が強かった。ドルより強いユーロと、弱いドルより更に弱い円の組み合わせは、当然にしてユーロ/円の急上昇をもたらしたが、そこに120円という心理的な抵抗線の上抜け(2日)と、年初来高値更新(4日)というテクニカルな要因が大きく貢献した可能性は考えられたらう。敢えて英固有の要因を挙げると、新味はないものの、英のEU離脱交渉の難航を示す報が目をつけた。3日、英中銀ベイリー総裁が、「年末の合意なき離脱(移行期間終了)に備えるよう」国内の銀行に警告したとの報は、その後のポンド頭打ち/反落を誘った可能性が考えられた。5日にも、EU側のバルニエ首席交渉官、英側のフロスト交渉責任者が、それぞれ、「今週の将来関係交渉では進展は得られなかった」ことを認めたが、前後してポンドはむしろ全面高に振れてしまった。5日発表された米5月雇用統計は、その内容にも、それに対する通貨市場の反応にも、困惑させられた。米労働市場の予想外の回復を受け、5日の米株式市場は開場と同時に急騰。前日まで株高はドル安要因だったはずだが、この局面では、何故かドルは対ユーロで(対円でも)明確に上昇。残念ながら要因は不明だが、上述の通り、ポンドだけは、何故か全面高で週の取引を終えた。

今週の英ポンド相場は、頭打ちを予想。値幅が出るならポンド反落を警戒する。先週、テクニカルな要因がユーロ/円を押し上げたように、ポンドの上昇にもテクニカルな要因が貢献した可能性は考えられた。2日の時点で、対円で4月中に二番天井をつけた135円台半ばを上抜け、5日には対ドルで同じく1.26台半ばを上抜けていたからだ。こうした水準で、たとえば投機的なポンド売りを仕掛けていた向きが、損失確定の買戻しを強いられる可能性は確かに考えられたらう。しかし、先週のポンド堅調は、やはり、ドル安、円安の要素が強く、消去法的なポンド堅調に過ぎなかったように感じられる。勿論、各国経済の速やかな回復=コロナ禍からの立ち直りに対する期待感が、今後も株価や原油価格の堅調を維持し、流動性逼迫局面で買われたドルや、リスク回避局面で買われ易い円の続落を誘う可能性は除外できない。それでも、ポンド堅調の継続を中心に見込み難い背景は、ユーロに対するこの間のポンドの冴えない値動き。先週のユーロは、欧州中銀理事会(4日)による追加緩和に向けての思惑が、下支え/押し上げ要因と読まれようだが、積極的な金融緩和を通貨買い要因と読むには違和感もある。確かに、市場の予想を上回る規模の追加緩和(PEPPの6,000億ユーロ拡大と来年6月末までの継続保証)や独憲法裁判所判断から距離を取った姿勢などは、特に(伊など)南欧EU加盟国国債の安定に資するとは言えたが、所詮は問題先送り、時間稼ぎに過ぎないとも言える。更に言えば、やっていることは欧州中銀に限らず、米連銀も、日銀も、英中銀も大差ないのが現実ではないか。小手先の値動きを作るまではともかく、明確、かつ持続性のある方向感を打ち立てる要因にはなれないように思われる。英経済指標は、今週、12日(金)に英4月製造業・鉱工業生産と英4月貿易収支が発表される。従来、注目度は低かったが、同日発表の英4月月次GDPの発表も、4~6月期の景気動向を占う目線で、数字によっては材料視される可能性もあろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(6/1~6/5)の値動き: (対ドル) 安値 1.2329 高値 1.2730 終値 1.2668
(対円) 安値 132.69 高値 139.74 終値 138.83



4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.6770 ~ 0.7100 74.50 ~ 77.00 円

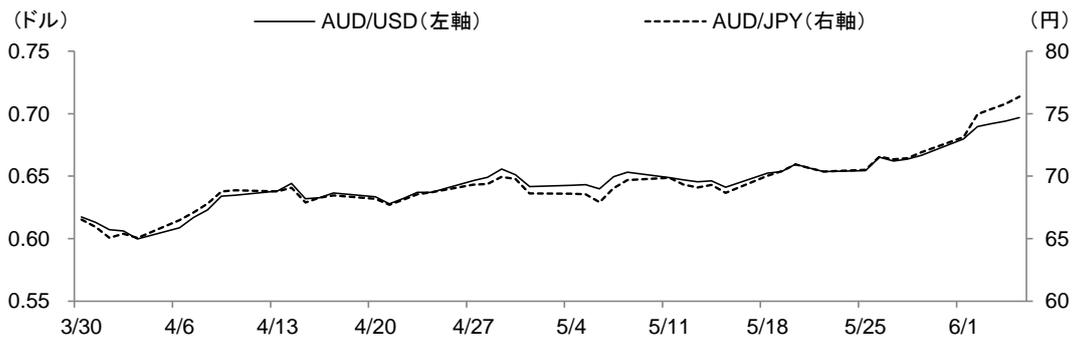
(2) ポイント【先週末までの回顧と今週の見通し】

先週1日の豪ドル相場は0.6660近辺で取引開始後、終日買いが優勢となり一時0.68台まで上昇した。5月29日のトランプ米大統領による記者会見で、対中経済制裁などの強硬な内容が出てこなかったことから安心感が広がり、豪ドルはアジア時間から買いが先行の展開となった。2日は、再び大幅上昇。豪州準備銀行(RBA)では事前予想通り政策金利が据え置かれ、市場の反応は限定的であったものの、株式相場が続伸し、米ドルが下落する中、豪ドルは大きく買い進まれ0.6890台まで上昇して引けた。3日は、0.6890台で取引開始後、豪1QGDP発表を控え結果が上振れることへの警戒感から急速に買い進まれ、高値0.6982を付けた。豪1QGDPの結果は前期比/前年比▲0.3%/1.4%(予想▲0.4%/1.4%)と、予想より若干上振れたものの、更に買い進まれる勢いは無く0.6910台で引けた。4日は、0.69台前半から半ばにかけてもみ合い。株価が調整する中、豪ドルもアジア時間内は利食い売りから小幅下落。この日発表された豪4月小売売上高は前月比▲17.7%減と過去最大の落ち込みを記録したが、豪ドルへの影響は限定的だった。欧米時間に入り、米ドルが売られる局面では一時0.6987まで買い進まれたがすぐに下落し0.6940近辺で引けた。5日は、1月以来の高値となる0.7000の節目を一時突破。資源価格の反発や、経済活動の再開が後押しする形となり、0.6970で越週した。

今週の豪ドルは底堅い展開を予想する。鉄鉱石をはじめとする資源価格の上昇を背景に、足許堅調に推移している豪ドルは、今週も上昇モメンタムを維持しよう。新型コロナウイルスによる世界的なリスクオフによって豪ドルも一時売られる局面があったものの、現在は徐々に経済活動が再開されている世界経済の再始動を織り込みつつある局面だ。先週末に発表された米5月雇用統計の非農業部門雇用者数も予想外の増加に転じ、経済が元に戻りつつあることを裏付けた。また、資源価格の急落によってショートポジションを組んでいたファストマネーのショートカバーも相俟って、水準を急速に切り上げたともいえるだろう。今後は、世界経済の動向と資源価格の動向にもよるだろうが、現状の水準が維持できるかが注目となる。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(6/1~6/5)の値動き: (対ドル) 安値 0.6648 高値 0.7013 終値 0.6970
(対円) 安値 71.57 高値 76.75 終値 76.37



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。